【59】

氏　名（本　籍）	上野惠司（うえのけいじ）（大阪府）
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第82号
学位授与年月日	昭和56年12月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	「五四」文学言語の語彙・語法史的研究—魯迅・葉聖陶編—
主　査	筑波大学教授　文学博士　牛島徳次
副　査	筑波大学教授　文学博士　内山知也
副　査	筑波大学教授　文学博士　安井稔

論文の要旨

本論文は，1950年代初期より徐々に形成されつつある現代中国語つまり〝普通話〟の実体を明らかにするために，これに最も深い影響を及ぼしている魯迅の言語の特徴を指摘し，「五四」時期における文学言語の語彙・語法史的な意義を考察することを目的とする。

本論文は，次の三編より成る。

第一編　本論，「五四」文学言語の語彙・語法史的研究

第二編　資料(1)，魯迅小説語彙索引

第三編　資料(2)，『葉聖陶選集』語彙索引

以下，順を追って，それぞれの要旨を説明する。

第一編，本論は，Ⅰ.魯迅小説の語法と語彙，Ⅱ.葉聖陶作品の語法と語彙，の二章より成る。

Ⅰの「魯迅小説の語法と語彙」は，三つの節より成る。論者は，§1において，「なぜ魯迅を取りあげるか」と題し，〝普通話〟と「五四」文学言語との密接な関連性から，〝普通話〟を明らかにするためには「五四」白話文学を代表する魯迅の言語の特徴とその意義を究明することが不可欠だと述べている。

§2は「語法上の問題」と題し，約40項の問題について魯迅の作品中の語法上の特徴を指摘し，これを共時的あるいは通時的な面から考察して，〝普通話〟との関係について論述している。たとえば，(1)の「〝呢〟〝哩〟」では，〝呢〟と〝哩〟とは同系統の語気助詞で，その用法に根本的な区別はなく，北方語以外の外くの方言において〝哩〟が用いられていることは今日よく知られているが，

魯迅は“呢”と“哩”を同じ程度に用いており，しかもこの“哩”は一部の方言を除いて，一般に疑問文には使われないが，魯迅の場合もその例外ではなく，疑問文には“哩”を用いず，“呢”を用いていることを明らかにしている。

以下，論者は「程度副詞の位置」「客語の位置」等の文の成分の位置に関するもののほか，“頗”と“很”，“有点”と“有些”等の副詞性修飾語の用法，“没有(V)”“在(V)”等の動詞句の構成，さらには“給”の介詞的用法，疑問表現に用いられる“可”等々，具体例を挙げ，北方語（現代北京語あるいは『紅楼夢』その他に見られる北方系旧白話など）・呉方言（蘇州語・上海語など）との関連において，魯迅の用法の特徴を精細に指摘している。

§3は「語彙の問題」と題し，魯迅が自己の方言や下江官話の語彙を使用していることを指摘すると同時に，その場合魯迅は，それらが共通語として通用するかどうかの判定基準を，明清の白話文（および，それを継承した清末の政治議論文）に求めていたと考えられると前提し，単音節動詞，二音節動詞，形容詞，接頭辞“阿～”，接尾辞“～子”“～児”“～頭”，助数詞の問題等，十数項に分け，それぞれ具体例を挙げ，その可能性の大きいことを論証している。たとえば，単音節動詞（その1）ではまず“尋”と“找”との用法について，明清での白話文での併用，清末の南方語・北方語での分化，魯迅の作品の製作時期による使い方の変化などを明らかにし，以下，60条について記述している。

IIの「葉聖陶作品の語法と語彙」は，Iの場合と同じく，三つの節より成る。論者は，§1において，魯迅の言語の特徴は，同じく呉方言地区の出身で，ほとんど同じ時期に白話による創作活動に従事した葉聖陶の作品に見られる特徴と比較してみることによって，一層明らかになるにちがいない，という理由で葉聖陶を取りあげた，と述べている。

§2は「語法上の問題」と題し，ほぼIの場合と同じ体裁によって，葉聖陶の言語の特徴が魯迅とほとんど同じであることを論証するとともに，魯迅の場合には見られなかったが，同じ呉語の影響によるものとして“不曾”，介詞としての“跟”の用法を指摘し，また，魯迅に見られて葉聖陶に見られないものとして“很V得…”“看他不上”“很変了顔色”を挙げている。

§3は「語彙の問題」と題し，葉聖陶の言語が魯迅に比べ，南方系旧白話への依存度と現実の下江官話の反映度が高いことを指摘し，実証している。

以上，I・IIの作業を通して，論者は，“普通話”というものがいかに複雑な要素を内にはらんでいるか，また，“普通話”の語法および語彙の中に占める非北方語要素（主として，呉語を中心とする南方語と南方系旧白語の要素）がいかに大きいかを，はっきりと指摘することができると結論づけている。

第二編，資料(1)は，魯迅の初期の三つの小説集『吶喊』『彷徨』『故事新編』の中から，“普通話”の語彙や語法の問題を歴史的にさかのぼって考える上で大切だと思われる語彙（単語のほか，連語・成語などを含む）を中心に選び，字音のアルファベット順に配列したもので，見出し約14,000条（適用例を合わせると約30,000条）を収録し，各条に作品名・頁・行，さらに必要に応じて品詞名・語機能を注記してある。

第三編，資料(2)は，第二編の場合と同じ目的・体裁で，葉聖陶の『葉聖陶選集』の中から，語彙・連語・成語を選び，配列したもので，見出し約4,000条（適用例を合わせると約7,500条）を収録する。

審　査　の　要　旨

1950年代初期より徐々に形成されつつある現代中国語つまり“普通話”は，それ以前約40年間通用していた“国語”つまり現代北京語と異なり，①語音は北京音系による，②語彙は北方語を基礎とする，③語法は現代の模範的な口語文による，というもので，その規範として想定され，あるいは，よく引用されるのが魯迅の文章である。

しかし，魯迅とて生まれつき“普通話”をよくしたわけではない。彼は呉語圏の出身であり，また伝統的な“文言”による中国文と，日本および西欧の文章を読むことによってその教養を形成し，さらに明清の白話文学との接触も，当然その文章にある程度の影響を及ぼしている。それにもかかわらず，上記の“普通話”の三原則を十分に理解せず，“普通話”イコール現代北京語と思いこむ人が少なくない。

この点に着目した論者は，“普通話”の形成過程を明らかにすることを目標とし，明清の白話文学より「五四」文学言語の解明につとめ，その第一着手として魯迅の小説集，さらに葉聖陶の『選集』をもとにして，それらの作品中に用いられている語彙・語法上の特徴を指摘，列挙し，共時的・通時的な考察を加え，それらと“普通話”との関係を明示し，“普通話”は決して現代北京語そのものでもなく，また，北方語のみによって構成されているものでもなく，非北方語要素がかなり大きな比率を占めていることを論証した。これは，単に魯迅によって代表される「五四」文学言語の歴史的意義を明らかにしたばかりでなく，“普通話”の現在を知り，今後を推定する上で，きわめて重要な論考であり，この方面での新分野を開拓したものとして，高く評価される。

ただし，本論文の調査の対象となった資料は，魯迅の作品だけについていってもごく限られたものであり，また，「五四」文学言語の歴史的な位置づけ，あるいは，“普通話”の全体像に対する現状分析等に関し，もう一歩ふみこんだ考察などあれば，さらに論旨が徹底したのではないかと思われる。しかし，これらは論者の今後に期待すべき望蜀の願いであって，本論文の学術的価値をいささかも損うものではない。

これを要するに，本論文は，斬新かつ周到な方法をもって“普通話”の実体解明にすぐれた成果をあげ，中国語研究に多大の寄与をなしたものと認められる。

よって，著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。